

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
荒一葉 曆文 ことは 朝香 六弦				しんい 音思 土璃 霜里 たか子	みづる 寒立馬	風舎	鶴城				徹齋 修	ひろし 鶴城 たか子	史齋 霜里 夏霖 はるみ	
車座は平和の形新酒酌む	老いのひとりふゆる近隣萩の雨	牧場のアイスおいしや蕎麦の花	鉦叩き鳴いて死ぬまで虫の村	秋茄子をほめて両手にもらひけり	秋の夜やジャニーギターの弾き語り	また一つ秋の蚊のあと傷となり	プログラム翳す父母席運動会	閑伽桶に無造作に生け彼岸花	戸の外は無料のサウナ残暑です	登校の自転車の風泡立ち草	妻逝きて日に日にしみる虫の声	道聞いてよりの道づれ爽やかや	送り火を終へて手酌の厨かな	日没を待ちかねてホツと息をつく
青木鶴城	河野凡士	後記朝香	小林土璃	荒一葉	新曆文	新井のりこ	本橋稀香	河野はるみ	森下山菜	しーしー	森佳月	西村青夏	檜鼻ことは	竹原直子

無事にお盆行事を終えた、落ち着いた雰囲気を感じる。無事にお見送りして一息に秋の気配。手酌という言葉に、霊的な世界から俗世へ戻ってきた感じがよく出ている。手酌の厨が送り火の後の静けさ、役目を終えた安堵感が伝わります。

見知らぬ者同士のほのぼのとした関係がさわやか。道を聞いた相手は私も近くまで行くので案内しますと親切に言ってくれた。道すがら世間話をしていたが、気持ちまで爽やかに変わった。

妻に先立たれた悲しみが、静かに伝わってくる。虫の声に寂しさが募る。

運動会の強い日差しをプログラムで遮る様子が見える。

軽妙で軽快な佳句である。傷ではなく、作者の前向きな心持ちが伝わってくる。

哀愁漂うそのメロディは他の季節には代え難い。傍らにはバーボンか、今宵はペギーリーと呑むぜ。

季節が効いている。褒められると誰でもうれしくなりますね。「両手にもらうがいい。秋茄子のみずみずしさは映像化される。実りの秋のお裾分けが嬉しいですね。知り合いの茄子畑を訪ねた。素晴らしい茄子だと褒めたところ抱えたきれいなほどの茄子を貰った。

車座は平和の形と断定したところが良い。ウクライナの街にも早くこんな光景を。酒は車座、平和が何より。まさに新酒を平和の中で酌みあう喜びですね。季節が効いており、シンプルで完成された句ですね。

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
	しんい		道を 絵 きいち						風舎	荒一葉 京子 光雲2 鶴城 允孝 史道 博史 道を	稀香	しーしー	凡士	きいち
染付の二色の世界夏の空	西瓜取り種吹き飛ばす縁の先 <small>雰囲気があります。</small>	そのメール未読で消す日秋立ちぬ	ガウデイの塔より高き秋の空 <small>秋の空の高さが良く表現されています。ガウデイの塔は完成時170メートル、比べる相手が良い。</small>	鴉ひより高音の囀れるオペラ歌手	聞き流し妻の小言や秋の風	五号車の車窓の空に碇星	満月や杯交わす青畳	黄泉の国ではありません曼珠沙華	なびきつつ秋桜みなうつむかず <small>一見ひ弱そうな「秋桜」が、実は芯がつよく、晴れやかに咲き誇っている。と詠んだ。心情句ではなく、時世句か。</small>	札所への百の石段こぼれ萩 <small>百の階段の登りを励ます萩が印象的。階に零れる萩は絵になりますね。秋遍路でしょうか。長い石段に零れた萩、趣ありますね。こぼれ萩が良いですね。こぼれ萩の特徴を上手に詠まれました。秋遍路の様子が見えます。こぼれ萩が疲れを癒してくれるでしょう。</small>	来歴は語らぬ女吾亦紅 <small>吾亦紅になぞらえてひとりの女性を簡潔に描いている。</small>	結界に闇迫り来し白牡丹 <small>白牡丹の妖しい美しさ。</small>	袋掛け安請け合いし首痛め	風吹けば風にかがやきゑのこ草 <small>風に揺れて陽に輝いている、美しいエノコログサを先日見てきました、馬鹿に出来ません。</small> <small>まるで川柳のような軽みがよい。</small>
知子	徹斎	霜里	石関六弦	網野月を	後藤允孝	かげろう	和田イチ子	秋谷風舎	みづる	俳翁	光雲2	幸子	衛	しんい

水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年九月

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年九月
	六弦	暦文	みづる 道を 京子 俳翁 風舎	しーしー	霜里 朝香 かげろう			音思 マスミ	荒一葉 土璃 マスミ	風子	佳月 風子	允孝 絵			
丸い葉に宿る雨粒目に涼し	行儀よく並ぶ朝顔鉢二つ 涼しさを感じる綺麗な句ですね。	名月や心無となり空となり 名月は心まで綺麗にする力があるんですね。	青銅の龍の口より秋の水 青銅の持つ硬く冷たい質感と透明な水が、初秋の空気を感ぜさせる。視点が良く、季語が生きている。ここにも秋の水があると気付かされた。ふと目に入った景と季語の取り合わせが効いている。一青銅の龍の口」から、敬虔な作者の、汚れにもまみれない爽やかな気持ち	四ツ目垣の雫震へる秋時雨 雫が見えるようです。	たこ焼きを丸くくるくる良夜かな 上手に焼けると美味しさもひとしお。団子の代わりに丸いたこ焼きを焼いて、満月を喜ぶ気持ちが楽しい。この句の季語は良夜こそ似合うと思う。	信濃路の草原早も秋の風	遠花火一年坊主あぐら好し	天の神そして地の神豊の秋 豊作は人の力だけではないことをうまく詠んでおられると思います。実りの秋。それも天の神・地の神のお陰。今年は無例年に無い暑さが続き、実りの秋を素直に喜べない方々もいるとか。	大西日フェンス間際に捕るフライ フェンス間際にキヤッチしたフライ、夕日も拍手している様子で季語が効いている。「フェンス間際」の緊迫感がいい。過ぎ去る夏を連想させる。安堵感・達成感が「大西日」とマッチしている。	稲架組し砥石の鎌も弾みをり 今年は無例年に無い暑さが続き、実りの秋を素直に喜べない方々もいるとか。	濁り酒濁りの深みにはまり込む 今年は無例年に無い暑さが続き、実りの秋を素直に喜べない方々もいるとか。	吹き流るる雲早送り颱風来 秋の空は非常に高くかんじます。その空から見る湾はどのように見えるか映っているのか。	睡蓮の沼渡り継ぐ小橋かな	龍野ひろし	
竹原直子	檜鼻ことは	西村青夏	中西みずほ	小林京子	渋谷きいち	倉田詩子	高原ひろし	日高道を	岡本たか子	絵	寒立馬	丸山マスミ	小川夏霖		

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年九月
寒立馬		曆文 音思 ことは みずほ	風子 夏霖 はるみ	ひろし		土璃 徹齋 朝香 マスミ	しんい 夏霖 のり子 佳月 博史 修 六弦	允孝 ひろし			みずほ				
いくたびも出でて愛でるや今日の月 “今日の月”は新たらしい月のはずだが、おっしやる通りだ。	湯河原の夕風穏し荒走り	口下手の友と思えぬ菊自慢 口下手でも、好きなこと、得意な事には饒舌。友の日頃とは全く異なる姿に驚くことがあります。そういう光景がはつきりと浮かぶ句です。苦勞のかいあつての出来栄え。饒舌のご友人の姿が目には浮かびます。今は、菊を作る人も減りましたが、好きな人は本当に好き。それがよく伝わってきます。	宵闇や既読の二字を待ちにけり 未だメールを読んでくれないとの不安が心によぎる秋の宵だ。既読が待つてまゝす。共感。宵闇の季語が良いです、私も	秋暑し処分に躊躇広辞苑	風色のいまだ変はらず曼殊沙華	御巢鷹のケルン噛みみる秋茜 「ケルンを噛む」むことで、歴史が風化しないことを表現している点が良い。日航機墜落事故で肉親を亡くした方の、鎮魂歌であろうか。中七・下五が鎮魂を表現していて、季語が合っている。慰霊碑に止まつた秋茜は深く悲しんでいるようだ。	馴れ初めの話に戻る夜長かな 煮物満載とオーバーな表現が面白い。秋の夜長にありがちな景が微笑ましい。馴れ初めの話で時間を繋いでですか。老夫婦の寝物語か。想像の方も聞く方も幸せな時間です。老夫婦か、カツプルの喧嘩か、想像が膨らみ面白い。	眠れぬと汗する夢や籠の虫 眠れない夜は夢を沢山見ます。良い夢、悪い夢、楽しい夢、落ち込んだ夢など良いですね。下五籠の虫が良いですね。	いろいろな墓の傍ら彼岸花	せめぎ合ふ鯉の太さよ池の秋	父となりりレー走るや運動会 自分にも、そういう時がありました。懐かしいです。	貝割菜ひとり寝で聴くらブソング	ワイン蔵葡萄の畝の続く中	銀木犀不思議や鼻に穴ふたつ	
俳爺	しんい	衛	後記朝香	河野凡士	青木鶴城	新曆文	荒一葉	小林土璃	河野はるみ	本橋稀香	新井のりこ	森佳月	しーしー	森下山菜	

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
		凡士 きいち		稀香 かげろう 寒立馬	のり子	絵	たか子	光雲 ² 俳翁 修	稀香	のり子 博史 しーしー		かげろう		
窓映る影の後ろの秋の風	萩揺るる下風通る水戸の庭	舟歌は筑後訛りよ水の秋 <small>演歌は土着性があり、吉幾三のように特に東北、九州のひとは歌唱にその土着性がでることをよくとらえている。筑後訛りは少々キツイがやさしい、船頭にピタリ。</small>	抱えたる膝を月影露わにす	かたちあるものなどなくて鰯雲 <small>鰯雲を観察しながら何か人間界を思っているようです。季語が読み手に上五中七をいろいろ想像させる句。何故にかくも想像を掻き立てるのか鰯雲。</small>	銀色に伸びる秋刀魚を切りあぐね <small>今のご時世、さんまは買うも切るも躊躇する。</small>	秋暑し吹き出すミスト救世主	帰宅する足の速まる茸飯 <small>職場に夕食は茸飯だというメールが入った。帰路にはやはり心が弾み足もはやくなる。</small>	独唱に続く合唱虫の闇 <small>夜半の秋にそつと耳をすますと虫の声がします。虫の秋を作者もまたリズムカルに唱和した良句かと。独唱につられて合唱が始まる。</small>	ガバリと言つて何も言はない秋の水 <small>西東三鬼の水枕のガバリ以来初のガバリです。秋の水辺は確かにそのような感じがします。</small>	子の髪の毛の指通り良き今朝の秋 <small>万物に潤いが戻る季節をわが子で実感、その視点がいい。季節の変わり目が伝わってきます。</small>	蒸し暑くはありませんか鶏頭花	汁の具はゴロゴロ浮ぶ今朝の茄子 <small>大きめに切ったと思しき秋茄子が食欲をそそる。</small>	朝の風既に秋気を含みをり	我が座る迷ひの窓へ秋ほたる
絵	知子	龍野ひろし	小川夏霖	石関六弦	霜里	徹斎	かげろう	後藤允孝	網野月を	みづる	秋谷風舎	和田イチ子	幸子	光雲 ²

						84	83	82	81	80	79	78	77	76	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年九月
						みずほ	ことは佳月	京子	光雲2 凡士			みづる はるみ		俳翁	
						鉦叩数へ初むれば叩き止み 秋の夜長の作者さん、秋の虫たちの様子が、目に浮かびます。	冬瓜に刃を入れられぬ独り者 困りましたね。冬瓜を一人では食べつくせないですものね。	一位の実熟れて新居に季巡る 新居の庭に一位を植えたとは。	曼珠沙華プリンシパルのトウシューズ 曼殊沙華のすらつと伸びた茎とトウシューズの対比がおもしろい。季語を曼殊沙華とおくことで、このプリマには光と華やぎだけでなく影を感じさせる。	洒落と粹なりし話芸や扇子閉づ 夕暮れの小児病棟残暑かな		衣被父恋ふことも無かりしが ふとした事で、普段忘れていた父を鮮明に思い出す瞬間がある。本当は、ファサ、コンでしょうか？	放物線描き寄越せし青蜜柑 丸山マスマ	秋めきて浜の先まで人気なし 浜に立つ作者の心情を言い切つてむべなるかな。	
						小林京子	中西みずほ	倉田詩子	渋谷きいち	岡本たか子	日高道を	高原ひろし		寒立馬	